

## 討論要旨

討論では、大きく二つの点に分けて議論が交わされた。その題意は、多々良会員が提示した「後継するもの」を明確にするための分析枠組に関わって、「いえ」をめぐる諸問題である。そして第二には、集団化組織化と農業および後継者問題に関する実態に焦点が当てられた。

まず分析枠組に関して、(1)「産業・職業としての農業」を現時点でそれぞれどうイメージするのか(岩本会員)、(2)「産業・職業としての農業」という時、家族経営として産業を維持するという含みなのか、企業的農業なのか(安孫子会員)という疑問が出された。多々良会員は、家族経営があくまでもコアになっているとしたうえで、「産業としての農業」は「いえ」というイメージで捉え、家族労働力を中心とした個別経営が前提となっているが、「産業・職業としての農業」は家族経営を基盤としつつも、集団的組織的経営が中心になっていくものであって、地域農業・地域宮農をどうやっていくかという視点があるところが違う、という考えを示した。これに対して、安孫子、細谷両会員から家族経営が前提となると二つの農業の相違がまだはっきりしないという指摘がなされ、細谷会員は二つの問題点を提示した。第一に「たとえは、一度外に出た後、了解して農業に戻った人はどう捉えられるのか。家業継承と職業選択はサツと分けられるものではなく、青年の葛藤の中で自覚的な選択になっているのではないか。」また第二として「兼業も含めた『いえ』の後継ということの中で農業が維持されているのではないか。稲作の場合、兼

業がかえって農業を維持させているという側面があり、カテゴリーでは分けられても実態では結びついた形で再生産されているのばはないか。」と問いかけた。

矢内会員は、多々良会員との共同研究を踏まえて、多々良会員が分けたのは見る視覚（視点）であって、実態は、一体となって存在するので、職業選択と「いえ」の継承とは切り離せないとし、安孫子会員もどちらかを後継するというのではなくて、両方やっていて二つの側面があるということではないかと捉え方を示した。多々良会員は、確かに実際には不可分であるが、しかしカテゴリーズする際には違いをよりはっきりさせていく必要があると述べた。

また、竹内会員からは継承の問題をめぐって、次のような見解が示された。「いえ」の継承は現在では制度的には存在せず、従って後継者の問題も制度的にはない。家産を継ぐという概念もはっきりしなくなっており、また家業という概念も不明確で、家族全体の労働力で経営するという意味が崩れてきている。しかしながら実態としては認められる。財産の継承、職業の選択、農業経営の将来、「いえ」概念（家産が付随する）を分けて考えた方がよい。生産組織で経営形態が変わった場合、誰があとをつぎ、農業を担っていくのか、「いえ」の継承、農地の継承、職業が問題となり、「後継」を限定してかからないと混乱する。

一方、農業問題という側面からの検討もみられた。長谷川会員は、農業を「いえ」から切り離して職業選択の問題として捉えてはどうかと問い、神谷会員は、農業の発展ということから考えた場合、家業という点から考えた方が良いのか、職業として考えていく方が良いのかと意見を求めた。これらに対して、岩本会員から「いえ」が

あるから問題になるのであって、それを抜きにすれば「後継」の問題は生じなくなるのではないかとの指摘があり、また多々良会員は家族労働を中心とした小農経営は今が苦しい状況下にあるが、しかしそこからどう乗り越えていくかが問題になるのであって、それと違った次元で今後の日本の農業が展開するとは思えないという見解を示している。

司会の安孫子会員は、後継するものの分析枠組の三区区分はまだはつきりしないが多々良会員の報告のねらいは、「従来の農家のあとつぎ」を考へても農業だけでは食べていけないという現実があるがゆえに、「集団的活動の中で引き継いでいく」しかないのではないかと、い点にあったと整理して、次に集団化と後継についての実態の検討に移った。

吉沢会員から、今回の報告事例では「家業としての農業」の後継という性格が強いとされたが、兼業化の進化が予測される場合の地域農業ないしは組織集団への影響はどうかという問題が提示された。多々良会員は、兼業で農業を維持していくという側面がある一方で場合によっては地域農業を崩すこともあるという見通しを述べた。また矢内会員は兼業化の中で生産集団が重荷になっている場合もあると指摘し、兼業者の家計にはプラスになっても、集団を担っている人たちは逆にいろいろな面で苦しくなり、結果として個別経営志向が強くなることを山形県遊佐町の事例を基に示した。多々良会員の事例では農用機械は共同所有だが作業はまったく個別に行なわれ、他方矢内会員の事例では作業を共同で行なうという違いがあり、集団化の内容の違いも大きく影響することが確認された。さらに、共同作業が農業労働力の補完となるかどうかは、出役超過（2ha以下層）・

不足（二ha以上層）の実態からみて、二haラインが分岐点になっており、二ha以下の農家では兼業に傾斜していくということが報告された（多々良良会員）。

これらを受けて安孫子会員は、集団化することによって後継者確保がむずかしくなるという面もあるという考えを示した。そして細谷会員からは「組織集団の場合は世代交替で大きく変わる可能性があり家族経営がどこまでもかかわってくる。組織を作ったことによって後継者問題はどのような影響を受けたのか。」という問いかけがなされた。多々良会員は零細農家の場合は集団を作ると離農が促進されるが、中規模以上層、少なくとも一兼農家については変化はないという状況を説明している。

ここで、組織を作ったことの意味があらためて議論された。細谷会員は、個別の経営がまず第一にあつて、それを補うためにさまざまな共同化が試みられているのが実態ではないかと指摘した。これに対して多々良会員は、個別の経営の補いの意味に加えて、兼業農家も含めて地域の農業が維持されていくという面では、生産組織ができるのとできないのとは意味が違ふと強調した。そしてさらに後継者に関して、農業後継という面では離脱を促す面もあるが、農家の後継という面では「むら」に留まれるという点でプラスに作用していると述べ、積極的に捕えようとしている。また安孫子会員からは、さまざまな面を持ちつつも、結局は集団化の中で個別の規模拡大を図るという面が強いのではないかという考え方が提示された。各見解は組織化の実態をそれぞれ別の側面から明らかにしたものと捕えられるであろう。

さて最後に、組織化と村落との関わりについて、多々良会員は次

のような補足の報告を行なっている。組織化をすすめる際、リーダーシップが重要となるが、それは個人の資質だけでなくその人が生まれ育ってきた「いえ」や「むら」との関わりも強いのではないか。今回の事例では、村落内に年令ごとに組織された講があるために同世代のまとまりがあり、世代間の継承もうまくいっている。この周りでは「ムラダチがいい」という言い方をするが、一般に生産組織ができるところは「むら」のまとまりが強いと考えられる。

だが一方では、今日の青年たちは「むら」がまったく見えていない状況が多く認められるという事態にも言及された（後藤会員）。以上、いろいろな角度から問題点が浮き彫りにされた討論であった。ただ、村落をめぐる問題については十分な討論ができず、次回に課題を残した。

発言の順序は一部変えてある。なお、参加者から多くの事例紹介が行なわれたが、紙数の関係で省略させていただいた。この他、重要な発言の欠落や発言の真意がくみとれていない部分も多々あると思われるが、ご寛容をお願いするしだいである。

（東北大学 星山幸男）

